随　筆

インド・ネパールの旅

津　和　秀　夫*

むかし，唐の太宗皇帝の命を受けた「玄奘」通称「三蔵法師」は，孫悟空，猪八戒そして沙悟浄を供にして，天竺，現在のインドに仏法を求めて，長いそして辛い苦難の旅をしました．私は生産技術の国際会議に出席の機会を得て，始めて印度の地を踏むことができました．西遊記に比べて何と気楽なことと感謝もし，申し訳ないような心地もしました．

8月の末から9月中旬にかけての3週間というほんの短期のものでしたが，日本とは，また西欧とは全く違った国を見たということは，私の生涯にとって，忘れ得ない貴い体験でありました．

カシミールの肉屋さん

私達のバスはカシミール高原の小さな町に停まった．出発するまでの20分間，私は車窓を通して町のたたずまいを眺めることができた．ここは海抜2,000 m，9月の初めというのに，日本の中秋の気候である．高原の強い日射しは受けていても，昼下りの田舎町は睡たげに静まっている．

牛や羊が悠々と道の真ん中を横行濶歩する．インドならではの風景である．町中が牛糞やその他の悪嗅で満ちている．その臭いにも既に慣れた私には，さほどにも感じられない．しかし下水などあろうはずがないので，道の傍わらには訳の分からない汚水がたまっている．そのそばでは雞が何やらつついている．

10軒ぐらいの商店が軒を連ねている．いずれも間口2間，奥行2間の長屋で，狭くて，どす黒くて，汚ならしいものである．看板などは全然ない．昔から顔なじみの人々の間の店であれば，客引きのために看板を出したり飾り立てたりする必要がない．住居の家と同じように汚ならしくして置くのが，当然の商店経営法なのだろう．と変なところに感心する．とは言え，日本の美しい店を見なれている私には，全く奇異な風景にうつってくる．

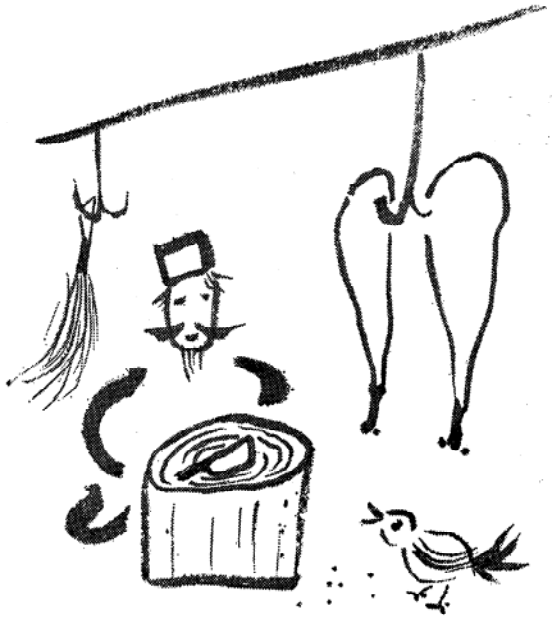

図1　端坐する店主（津和画）

私の車窓の正面には肉屋がある．肉屋といっても，牛を神と崇めるこの地方では，羊肉（マトン）だけを売るわけである．肉屋は権威を象徴するのか，他の店より床が高く，客は4，5段の階段を上らねばならない．こうして客は，立ったまま机に向い，その奥にまな板を前にしてドッカと大あぐらで座る店主に向い合う．店主は階段の反対側の隅に，道路を横にし，壁にもたれて坐る形となる．

まな板というのは，大きな木の切り株で，正確には「まな株」と言うべきであろう．使い込んだために中央部が随分とえぐれている．まな板には，なたのような庖丁が一本横たわっている．店主の横，道に面して，骨つきのままの羊

* 津和秀夫（Hideo TUWA），大阪大学，工学部，精密工学科，教授，工博，精密工作

肉がぶら下っている．それから大きな天秤がある．馬のしっぽを束ねたはたきがぶら下っている．これが肉屋の総べてである．

折しも，立派なひげを貯わえた，しかしハダシの青年が現われた．階段を上って台を隔てて，店主に一言二言．店主はやおら猿臂を伸ばして，2本しかない肉のうち，小さい方を鉤から外し，庖丁を器用に使って，一片の肉魂を切り出した．天秤にかけて目方を計り，またまな板に乗せてブツ切りにする．この動作は見事なもので，流れるような手練の業である．ちょっと間を置いて，ひざ元に重ねてある紙の一枚をとり出して肉を包む．この紙は汚ならしい古雑誌の半頁である．もちろん肉の全部は包み切れなくて，上半分は丸出しとなる．受取った青年は，代金としてよれよれの1ルピー札2枚と，2枚の小銭を机上に残して立ち去った．

こうして総べては1分から2分という短い間に終わった．この肉，私は300 gとにらんだ．計算すると，羊肉の値段は，100 g 20円となる．1日1ルピー（30円）で暮せるという話を聞いていたが，目の当りにこの光景を見て，私は「なるほど」とうなった．そしてまた，店主が客に向って一言も声を出さなかったのに，重ねて感心した．

店主は客が帰ったあとで，ゆっくり庖丁でまな板をこそぎ，残った肉かすを指先きで丸めて道にポイと捨てた．やがて雞か小鳥がつつくことであろう．あとは泰然と坐って身じろぎ一つせず，何を想うか，何を考えるか，いや無念無想の行者のように，ただひたすら坐るだけである．蝿が行者の顔前を飛び交う以外は，総べて静寂，山の午後の日射しは肉屋の軒先を照らして明るい．

蝿が余りにもうるさくなったか，行者は鉤にぶら下っている馬のしっぽをおもむろに外して，これでバァッバァッと追っぱらう．そしてゆっくりとしっぽを鉤にかけた後，再び沈思冥想にふける．その横顔からは尊厳の気さえも流れ出ている．

これは店主の70年を越す人生の体験から来たものか，羊肉をさばく積年の修練から出たものか，はたまた宗教信仰から生まれたものかは解らない．とにかく端坐する姿は神々しく，しかも1分のすきもない剣豪の「静」の構えである．

しばらくすると，いかにもこの町の顔利きらしいデップリした老人が店の前を通りかかる．彼は威厳あるカシミール服を着て，足にはつっかけをはいている．ちょっと立ち止まって呼びかけ，上と下で短い話をする．「おい，どうかね」といった種類の話らしい．今度は嫁が外から帰ってくる．ちょっと挨拶して，サリーの肩かけをひるがえすようにして奥に消える．店主はただ黙っているだけで，身じろぎ一つしない．再びカシミール高原の午後の静寂が続く．

その静けさを破るように5才ぐらいの愛くるしい孫娘が，羊肉の臓物をぶらさげて現われる．孫は祖父を無視して，目の前をひらりと通り過ぎて町に消えた．そのとき行者の顔に一瞬の笑みの浮んだのを，私は見逃さなかった．とにかく，この肉屋は，裏に息子の家族が住んで，そこで羊を飼い羊をバラして，それを表で売るという生産者直売の近代経営を実践しているらしい．

また今度は，行者の軒先に名も知らぬ，かなり大きい小鳥が現われた．行者の手の届きそうなところまで来て，しきりに何かをついばんでいる．しかし行者は相変わらず知らぬ顔．この小鳥も彼の毎日の友達なのだろう．静かなひとときが経った後，カシミールの老肉屋さんは，馬のしっぽを鉤から外し，パッパッと払って，友達の蝿とまた対話をした．そして私達のバスも，無視され通したカシミールの肉屋さんの店先を離れた．

タジマハール

私はタジマハールのことは何も知らなかった．しかし今の若い人達はよく知っていて，インドへ行ったら是非タジマハールを見たいとの憧れを持っている．子供の頃読んだ本に，タジマハールの美しさと，これを建てたシャジャー・ハン王と王妃のロマンが書いてあるそうだ．

首都デリーから東南へ300 km，飛行機で半時間余りのところ，大平原の真ん中にアグラという町があり，ここに荘大美麗，誰でもアッと驚

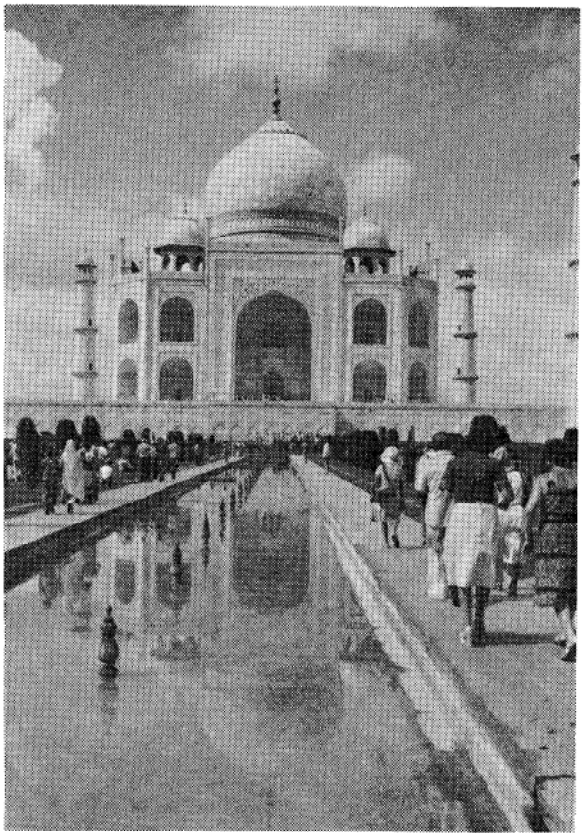

写真1　タジマハール

くタジマハールがある．

タジ王妃は王と共に，南方遠征中に戦陣の中で病没した．若く美しく，賢こくて心の優しい，世界一の女性を失って，ハン王の嘆きは如何ばかりであっただろう．死の直前に王妃の遺した「わたしに世界一の墓を」の言葉を実現させるために，王は20,000人の労働者と22年の歳月をかけて，名実ともに世界一のタジマハールを築いた．

塔の高さは71m，それに応じて建物が壮大華麗である．美しい白大理石造りの殿堂は，南国の陽光に輝いて，えも言えぬ美しさである．壁，天井，床の大理石には色とりどりの貴石宝石をはめこんで，美しい模様を描き出している．世界一の美しい建築物と言われるのももっともである．「日光を見ずに結構と言うな」とあるが，日本人も世界的になったので「タジマハールを見ずにタジた（たりた）と言うな」としゃれて見たい気持ちである．

塔の中央地下室には，王と王妃の石棺が安置してある．王のは小さく，王妃のは大きい．それもその筈，王はこれと同じ大きさの自分の墓を川の向う側に黒い大理石で造る予定であった．ところが流石に富を誇る大王も，その出費には堪え得ず，国の財政も怪しくなり，ついに息子の代となって，哀れにも大王は，タジマハールから10kmぐらい離れた城の一室に幽閉されて世を終わった．王の部屋からは美しいタジマハールが見える．日夜王の胸中に去来するものは何であったろうか．

ともあれ．この美しいタジマハールを訪づれて驚いたことがもう一つある．建物は壮大美麗であるのに，内部は何一つとして，調度装飾品のないことである．恐らく建物に匹敵するだけの立派な宝があったはずである．総べては英国の統治下に持ち去られたのである．ここだけではなくて，インド全国にわたって有名な寺院や王宮，城郭は総べて英国の掠奪によって中味はガランドである．インドの目ぼしい文化は大英博物館のインド館に行かねばわからなくなっているようだ．

聖なるガンジス河

デリーとカルカッタを結ぶ線上の中央にバラナシという古都がある．英国統治下にはベナレスと言っていた．ここはガンジス河のほとりにある古い街で郊外には威勢を張ったアショカ大王の居城がある．学問と老人の街と言われる．それもそのはず，ヒンズー大学があり鹿野苑もある．聖なるガンジス河で身を清め，そしてここで死んで，灰を河に流してもらいたい老人が全国から集まって来る．

ガンジス河の夜明け，聖なる河に禊して，太陽を拝む禊場を見るために，暗いうちにホテル

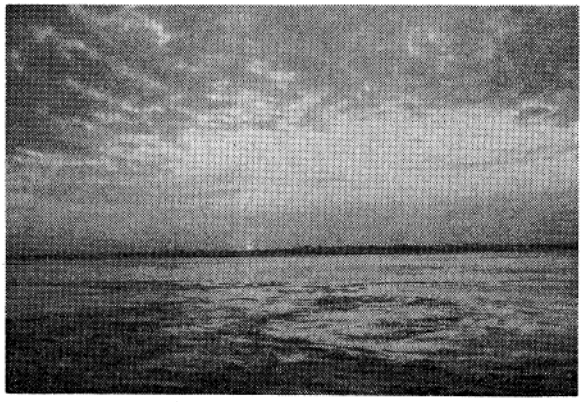

写真2　聖なるガンジスの日の出

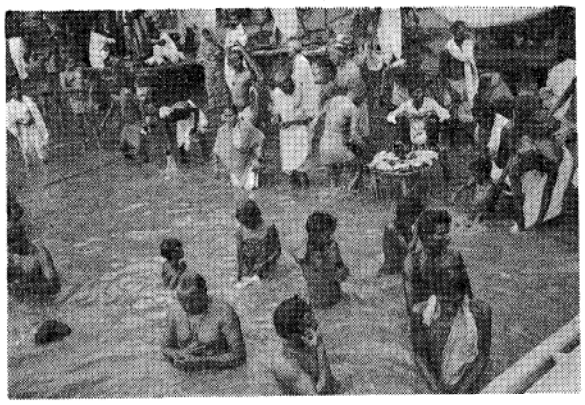

写真 3　ガンジスの禊

を出た．バスを降りてから禊場までの細い道は実に凄かった．牛がおり，人がウヨウヨ，乞食，癩病，汚物，物売り，とにかく汚ならしいものの百貨店と言った感じである．河岸から小舟に乗った．

河のほとりはギッシリと石造りの古い家で，その間のところどころに石だたみの禊場がある．折から対岸の大平原に真っ赤な太陽が昇る．横雲が紅に染まり，ガンジスの大河に滔々と万古不易の真理を秘めて流れる．

禊場にある一人の聖者は，胸まで河につかって頭を洗い顔を流し，口をすすいで，ひたすら太陽を拝む．その相はまさに聖者，額に輝きの発しているのを見た．その周囲には大勢の人達が，芋の子を洗うように行気している．少し下手のところでは仏様を火葬にしている．とにかく凄いところである．

男の死体は白布に，女は色模様の布に包まれて火葬を待っている．薪を野積みにして焼いている．焼け残った足だけが見える．子供の仏様は重りを付けてそのまま河に投げ込むそうである．とにかく凄い景観である．まわりには大勢の人達が，立ったり坐ったりして眺めている．

ここで火葬にされて灰を河に流してもらうことが，ヒンヅー教徒にとって最高の幸福である．そのため老人が全国から集まる．しかし予定通りに死に得ずに，お金を使い果たした者は路傍に寝て乞食をしながら，その幸せな時を待っている．

このような秘密にすべき場所に，外人の観光客を平気で舟で運んで，お金もうけをする人もある．私たちは舟から降りるとき，舟頭からチップをねだられた．日本人は気前よくそれに応じた．

インドの貧困はすごい．カーストと呼ばれる階級制度と宗教とが，がんじがらめに貧しく無智な人々をしめ付けている．しかし彼等は，如何に貧しくても，それなりに人生を楽しんでいる．と私は感じた．日本では生活を楽しむというが，インド人はもっと大きな人生を楽しんでいる．貧しい子供たちが嬉々として笑い，仲間とふざけ合っている．大人達も，路傍に寝る生活をしておりながら屈托がない．これは一体どうしたことだろう．

私はその謎を解く鍵をガンジス河のみそぎに見た，と思っている．あの聖者はただ者ではない．大した人物である．それが乞食たちと共に暮して，彼等に人生を語っている．彼等の周囲は総べて同じような人達，しかも温たかい心で自分たちを見守っていてくれる聖者がいる．人生を楽しむようになるのは当然である．インドという国はスゴイ国だと感心した．

ネパール王国首都カトマンズ

2週間のインドの旅を終えた私達の団体，100名の世界各地からの男女は，いま最終の目的地，ネパール王国の首都カトマンズへと飛んでいる．遙か雲海の彼方にはヒマラヤの白い山脈が見える．眼下には緑の山々と，その間に挾まれた美しい平野が展がる．

日本の空を飛んでいるのと同じような風景もある．山には整然と植林がされており，平野にはよく耕やされた田地がある．それを縫うように道路があり，村落が点在する．ところどころの山は，長野県に見られるように，山頂まで段々畑に開墾してある．

これは凄い国である．ネパール，ブータンと言えば，小学校の地理で，名前が覚え易かったから知っていただけで，何の興味も抱かなかった国である．私はいま，何の縁か分らないが，そのネパールの上空を飛んでいる．ネパールは王国である．日本とタイと共に，東洋に三つしかない王国である．ムガール帝国はインドを征服したが，次いでイギリスに征服された．しかしネパールには流石の英国も手を出し得なかっ

写真4　ネパールの山河

た．私たちの祖国日本と共に，未だ外国に支配されてない珍らしい存在である．今日まで過ごしてきたインドとは全く違う．

やがて首都カトマンズが見え始め，機内放送が着陸を報らせる，そのとき私たちの団体は一せいに拍手をした．今までにはなかったことである．それもそのはず，皆はネパールへ，カトマンズを見るために，炎熱のインドの旅を続けてきたのである．

ホテルに落ち着き，一同は昼食のテーブルについた．見れば，舞台には日本人にそっくりの顔をしたネパール人のバンドがいる．私たちを歓迎する演奏が始まった．それはなんと，「知床旅情」であった．長い旅路の果てに聞く祖国の美しいメロディー，私は胸はとたんに熱くなった．目に涙さえにじんで来た．

ヒマラヤ登山口「ポカラ」

カトマンズで一行と別れた私たちは，更に近くヒマラヤを仰ぐために，小さなプロペラ機に乗ってポカラへと向った．機は緑の谷間を縫うようにして飛ぶ．谷の奥に，やや広い平野がある．眼下に縁に囲まれたポカラの町が展がる．やがて機は草原の滑走路に着陸した．

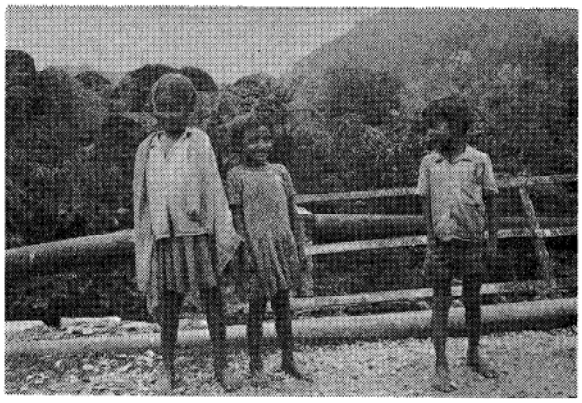

写真5　ネパールの子供たち

乗客は20人足らず．登山家らしい人，山に憧れる家族，私たちのような観光客など，世界からのとりどりの人達である．機から降りると男たちがワッと寄って来た．中には10才余りの少年たちもいる．あとでわかったことだが，登山者の雇うシェルパたちである．

ここから1週間の行程でベースキャンプに到着できる．そこは恒久的なキャンプを建設中で，資材を小さな飛行機で運んでいる．最近はトレッキングと称して，ベースキャンプ地のあたりまで行って，登山を楽しむ人たちも増えている．このような人達も含めて，登山家たちはこの町から，いよいよ目的地に向かって行進を始める．だから町は小さいが活気があり，ホテルも山男たちを迎えるために清潔感がある．

生憎と，曇り空のためにヒマラヤの山々は見えなかった．しかし翌朝は雲が開き始めたために，雲の間からチラリチラリと凄い山容を仰ぎ見ることができた．富士山の2倍以上の7,000，8,000m級の山岳は，ただもう「恐れ入る」の一語に尽きる．陽光に白く輝く氷と岩の山，大氷河も見える．萬古悠久の哲理をひめて，ただ雲上に聳え立ち静まり返る．思わず「神々の座」と手を合わせた．

ネパール青年「利子」君

私たちは一行と別れて後の旅行については，予め「カトマンズ旅行社」に依頼してあった．これは友人に紹介してもらったネパールの大人が段取りしたことである．

カトマンズのホテルに到着し，部屋に落ち付くやいなや「面会人がある」という電話で，私はロビーに急いだ．見れば旅行社派遣の社員である．もちろん私は流暢な英語で彼に話しかけた．ところが彼の返事が日本語であったのに驚ろいた．要点を言えばこうなる．「私は日本語が話せますから，どうか日本語でおっしゃって下さい．私の名はリシです．銀行の利子と同じです」そして彼は英文の名刺に片仮名でリシ・ラザバンダリと書いてくれた．彼の書いたンは逆に上から下に書くためにソの字である．私たちの大学生も，片仮名をよく習わないために，似たようなことをやっている．

とにかく私は嬉しくなった．それから後はオール日本語で行くことにした．リシ君は22才，カトマンズの高等学校を出ている．彼の日本語はその学校を指導に来た日本人の体操の先生から習い，また塾に通って仕上げたという．

リシ君の日本への憧れは大変なものである．旅行社を紹介してくれたネパール大人といっしょのとき，「是非日本に行きたい」と言う．大人は「是非考えてくれ」と私に頼む．私は「是非努力する」と答えた．

ネパール人の顔は日本人とそっくりなだけでなく，その言葉も日本語とよく似ている．同じように山の多い国に住み，同じように聡明勤勉である．私はアルプスの麓にある貧乏なスイスが精密機械の生産を目指したことによって世界一の富裕な国となったことを知っている．ネパールはアルプスの2倍も高いヒマラヤの麓国である．精密機械工業こそ，この国の未来を築くと見た．

ネパール人は日本のことをよく知っている．とくに現国王の戴冠式に皇太子殿下御夫妻が御訪問されたことに感動している．しかし日本人は，アジアで最も日本的なネパール王国のことを全く知らない．

そこで私は，利子君を私たちの精密工学科に聴講生か研究生のような形で，一年ぐらい留学させることを考えている．そしてまた，多くの日本人がネパールに旅して，その素晴しい国土を見るための橋渡しをするつもりでいる．

ネパールへ行こう

ネパールと日本

ネパールは良い国である．わが祖国日本と非常によく似ている．国土の面積は日本の半分弱，人口は1,100万と，日本の約1/6，そして日本と同じように，全国土が山また山の山岳国家である．世界一の大ヒマラヤ山脈とその前面に横たわる小ヒマラヤ山脈，そしてインド平野との境をつくるシワリク丘陵の間に横たわるわずかの平原に人口の大部分が集まっている．気候も日本とよく似ている．夏は暑くてもインドのような炎熱ではなく，冬は寒くても薄氷がはる程度である．雨も降れば，ヒマラヤの清流もある．植物は繁茂し，美しい花は咲き乱れる．そして北の空を眺めれば，神々の座としての世界最高のヒマラヤの聖山を拝むことができる．正にこれは地上の楽園である．ただ日本と違うところは，周囲を陸に囲まれているということだけである．日本は海のために早くから世界を相手にして交易ができた．ネパールは陸に囲まれているために，この点がおくれた．しかし交通の発達した現在，いよいよネパールも世界に目を向けるようになった．しかも彼等は最も熱心に日本に眼を向けようとしている．

ネパール人は日本人と同じような顔をしている．あのオッサンは木村さん，あの美しい奥さんは中村夫人といいたいほどである．また言葉もよく似ている．ホテルのバーの留まり木で一パイやっていたとき，バーテン氏がウスノロのボーイを叱った．「オイ，お前，早く持って行け」私は一瞬，日本語で言ったのかと思ったが，やはりネパール語であり，聞くと意味も全く同じであった．

ネパール人は山岳の多い国土に生き続けたために．日本と同じように勤勉である．そして手先も器用で文化も高い．工芸品を見ると，日本のものと同じように細かに気を使い精巧な細工をしている．インドでは見られなかったことである．こうして高い文化を持っているから，人間が温和で総べてに寛容である．インドとパキスタンは宗教上で互に戦い合っているのに，ネパールでは，ヒンズー教も回教も仏教も共存し

ている．異なった宗教の寺院がくつっき合って和んでいる姿は，ネパールと日本とにしか見ることができない．

ネパールと日本が似ていることの決定的なものは，王国ということである．あの激しかった白人の侵略のもとで，独立を保ち得たのは，東洋では日本とタイとネパーの3国である．これは素晴しいことである．19世紀の始めにはネパール人は祖国の独立を保つためにイギリスと勇敢に戦っている．そのため流石のイギリスもネパール征服をあきらめている．

ネパールとスイス

アルプスのスイスとヒマラヤを仰ぐネパールとは国の成り立ちが同一である．スイスは籍地が少ないために苦労をなめた．勇敢な山岳兵としてヨーロッパの各国に傭兵を出して，それによって辛うじて国の生計を保ってきた．その貧乏国スイスが，現在の富裕国となったのは，教育の普及と精密機械の生産を国是として，国民が一致団結して努力してきたからである．

ネパールの現在は貧困時代のスイスに似ている．現在もグルカ兵として勇名を馳せるネパールの山岳兵団を英国およびインドの傭兵に送っている．鎖国を守っていたネパール王国も15年前に開国して，現在は急激に近代化が進んでいる．これと言った見るべき産業がないため，今は観光産業が主要なものとなっている．ネパールの国土はスイスの3倍，人口は2倍，そしてヒマラヤはアルプスの2倍の高さをもっている．ここに精密機械を興すならば，東洋のスイスとして，未来の繁栄は間違いのないところである．いやむしろ100年後には，ヒマラヤのように世界一の精密機械生産国となるに違いあるまい．

国民は勤勉で頭脳明晰，それに美術工芸に優れた才能を持っている．温和で礼儀正しく寛容で忠誠心旺盛である．国王は若くて進取の気象に富んでいる．そして教育の普及に力を入れている．カトマンズには立流な大学も工科大学もある．このようなよい雰囲気の国には，必ず高度の精密機械工業が生まれると，私は見ている．

ネパールへチャーター機で

ネパールには阪大医学部の先生方が非常に力を尽した．癩病，肺病，マラリヤの撲滅に献身的な努力をしたために，ネパール人は大阪大学と聞くと，「何とか先生を知らないか」と言って感謝の意を表わすほどである．医学部諸先生のおかげで社会は非常に衛生的になって，国民は喜び，日本に特別の親近感を持つようになった．

今度は工学部の出番である．精密機械工業を興すために，工学部が乗り出し，政界，財界，産業界の力によって，ヒマラヤの麓の谷々に精密機械の工場を建設したいものである．精密機械なら，ネパールから空路世界のどこにでも運ぶことができる．そしてまた，精密機械の生産に最適の国民が，適職のないままに，牛を追ったり，街頭でブラブラしながら無聊をかこっている．

私はそのうちにジェット機をチャーターして，大阪から直接にカトマンズ空港に飛ぶことを夢見ている．百聞は一見に如ず．とにかく，各界の有志にネパールを見てもらって，アジアの未来のために，想を練って頂きたいためである．そのときは皆様のご協力をお願いします．